

---

# 山頂の事件

よつつん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

山頂の事件

### 【Zコード】

N6464A

### 【作者名】

よつん

### 【あらすじ】

迷推理を必ずした後名推理をする迷・名探偵の尾島健也の息子、尾島健次が4泊5日の宿泊学習に行つた。そこで、誘拐や宝探しなどの事件がおきる。お父さんのいない中で健次は少年探偵団を作つた。誘拐事件を健次は解決することができるのでしょうか。

## 序章（前書き）

この作品は始めて僕が作ったのでおかしな点があるかもしれません  
が気にしないでください。

序章

明日は絶対楽しい日になる。なぜかというと今日は、初めての森林学校だ。・・・というわけで今から始まる物語はその初めての森林学校で起きたことです。

一曰寝しているときに先生の見張りがついている場所で誘拐された。そして一日目にみつけた不思議な紙と書かれたこと。そして、幽霊。さらに、健也と警察の関係と間でおきた事件と人間消失事件とそれにつながるかわづててくる男の

メインの一つの事件 + 宝探しの謎 一つ + オカルト + 後田起きた事件  
二つ + 謎の男の推理小説です。

まずは物語を始める前に、登場人物の紹介をしましょ。

までは詰り手である僕 女は男（あ）の名前を見ればわかるが）の尾島健次です・・・・・・うーんあまり僕つて特徴ないなあひとつあるとすれば

パズルが得意ぐらいかなあ。  
まあこれから話を進めていくわけだから  
らそれを見て

性格などを考えて下さい。（ちなみに茶木茶木小学校の四年生です。）

次は主人公で姓は男（ - だからわかる）で、てシツニミサメて下さいね）の尾島健也、

僕のお父さんです。・・・・・うん！これほんぱいありますだ。

性格は、

まず田立ちたがり屋で自信過剰のお父さんです。

後はお父さんはある一部の上田の言ひどなに何でも聞いたやう  
だけど、自分が認めない人の言つことは、絶対に上司でもいうこと  
を聞かない。

今、僕が知つてゐる、眞ひ」とを聞く上向さんは一郎さんとお父さ

んの幼なじみの正一さんだ。

次に言うと、さつき言つた迷・名探偵といふ言葉の意味は迷探偵でもあるし名探偵もあるということだ。

つまり、お父さんは絶対最初に迷が何個かつく推理をする。つまり

迷・迷推理とか迷・迷・迷・迷推理とかだ。

そのときあきれて帰られそうになると必ず何かひらめく。

それはもし、一回目が迷推理か迷・迷推理だつたら名推理だ。

もしそれ以上だつたら迷がひとつづつなくなつていぐ、

つまり失敗は成功の元というけどひとつずつ事件に必ず一回は間違える、おかしなお父さんなんだ。これでお父さんの紹介は終わり・・・かな？

とにかく、次は僕のお母さんで姓は女の尾島昌子おじま まさこです。

これもあまりないけど、あまりこの物語には出ませんからちょっと説明します。

えーお母さんはパズル好きで、よく夕食のときなどにクイズを出します。

僕のパズル好きはそこで教えてもらつてゐるからだ。

後はさつきも言つたとおり出ないのでかかないで、あと出るのは、僕と少年探偵団を作る次郎・角田・真太・正太郎と警部補の健也の幼なじみの真京太郎と

クラスメイト・先生や警察のその他大勢です。（ああ、みんながその他大勢つて何だよ！ていつてきそ。）

とにかく登場人物紹介は終わつたのでこれから物語を始めます。

## 第一章 事件が始まるまでの時間へ

ふあーあ、すつげー眠いよ。昨日、今日が森林学校つて言ひとでうかれちゃつた。

まあ重い荷物を持ってばきつと眠氣も覚めるだろ。なんたつて今日は初めての森林学校の四泊五日の内の一日目なんだから、荷物も多いんだ。とにかく今田起きたらお母さんが弁当を作つてくれるだろ。と思つていた。

でも甘かつた、おにぎりどころか起きていたのだ。

寝坊をしているお父さんを横田でにらみながら（どうしてにらんだかは後で言つ）お母さんを起こしていった。

学校に行かなきや行けない時間は七時、今は六時なので時間がない。僕はお母さんを起こすと、またもやお父さんを横田でにらみながら、簡単なものを作つていぐ。

たまごやき・鶏肉・おにぎり・トマトザートのイチゴなどをざんざん入れてく。

何とかできただけつめこむとコックの中に入れて家から出て行つた。

すると、実は簡単なものを作つていたので、たつた三十分でできていたんです。

つまり、急いで出たので三十分だ。そして急いで走つていったら五分ぐらいでつくことになる。

そして、三十五分に着いたら門は閉まつていた。そして、時間を間違えたのかと考えながら歩いてうちに帰る。

一時間早く来ちゃつたのかな？

とか

まさか、明日遠足の日じゃないよね？

とかを考えながら歩いて帰ると家への道は十五分、うちに着いたら五十分ぐらいだった。するとお母さんがおきてきて

「あー、おきていたの。じゃあ、ちょっと朝起さん作ってくれない。

もし作ってくれないのなら今年はもうゲームも漫画も本も買わない  
し年玉も渡さないからね！」

ほとんど脅迫じゃないか。

二つ目。から鋭くなつたお母さんの口調にこびり思つた僕は頭を抱えたくなつたが、  
ショウがなく朝ごはんのおにぎりを作つてあげた僕もひとつを急いで食つて、時間を確認する。

なんともう五十五分になつていた。お母さんが

「いつてらしゃい」。

といったのを、いつてきますとも返さずに、急いで出て行った。  
そして学校に着くともうすでにみんな着いていてバスに乗る準備をしていた。

何とかバスが出るには間に合つたが、茶木茶木小学校は時間に厳しく、

クラスの中で一番来るのが遅かつたものは、遅刻マンなどといつ名前をつけられて、

しかも三日連続で遅刻マンになると遅刻大王になるといつ伝統があるだから僕たちは  
こんな伝統いらねえだろ。といつも思つてゐる。つまりぼくはその  
遅刻マンになつてしまつたわけだ。

幸いにも今までいつも早く来ていたので遅刻大王にはならなかつた  
が、いつも早く来ていたのでみんなにずっとひやかされた。とにかくバスは出発して各班のレクが始まった。

## 第一章 事件が始まるまでの時間 2

茶木茶木小学校ではひとつの中年で一つのクラスがある。四年生は三クラスで、

班は十班まであって、一班から三班が一組で四班から七班までが二組で一番多いのが七班から十班までの三組だ。

一組と二組は一つの班の人数が六人ぐらいだけど三組は一つの班の人数が十人もいる。僕は三組の八班だ。

バスは全部で四台あって一号車は一班の男と四班と七班だ。

二号車は一班の女と五班と八班だ。僕はこのバスに乗っている。三号車は二班と六班と九班だ。

最後に四号車は三班と七班と十班だ。

バスは小型だけど一号車と二号車はけつこうあいている。

だけど三号車と四号車はぎゅうぎゅうでレクどころじやなくなる。

僕も三年のときの遠足で同じようにバスに乗ったけど運悪く二号車でマイクを使って

話し始めようとするとみんながぎゅうぎゅうづめになつて、なぞなぞを出すところは書いてある答えを見られたりして大変だった。

しかも、一息ついと伸びをすると立っていた女の子を触つてしまつて

「なにすんのよ…」

て叫ばれてしかも思いつきりけられて大騒動になつた。

僕はそのだいそうどうのとき女の子を触った子の横について女の子を触った子に向かつて女の子がやつたけりが、

横にいたこの僕に思いつきり当たつた。しかもバーのようなところでおづえをかけていたので思いつきり頭にぶつかつた。

さらに、不幸は重なり、その子は空手を習つていて有段者だったのだ。

結果、僕は覚えてないけれどそのままその場で気絶したらしい。

しかも、そのとき僕は一週間、記憶喪失だった。僕は、一週間後、見舞いに来たけつてきた子が「こつ」と頭をたたいてきた。

「まあそんな変な顔すんなよ。」

そして、頭がただでさえくらくらしていたのに頭をいきなりたたかれたので僕はまた気を失った。

そして五時間後、ぼくはやつと意識をとりもどして記憶も取り戻したらしい。

なので、バスの三号車と四号車と、空手の有段者の女の子は僕の天敵になつた。

だからどうしても七班か八班になりたかった。

今年は何とかなれてよかつたけど油断せずに、来年からもどんな人と一緒になつても七班か八班になりたいと

思つてゐる（でも空手の有段者の女人とはやつぱりヤダ！）。

では暇つぶしにレクでたなぞなぞを十連発（答えは泊まる場所についてから！

1 熱があるときは走り回つて働いて熱がないと休むものって何だ  
うひ

2 突然おなかを壊したとき病院まで何秒かかるでしょう。

3 笑いながらあめを食べたときあめは何個たべたでしょう。

4 えんぴつを使わずに目をつぶつて書いたものなんだろう

5 顔の真ん中に「つ」の字をつけて泳いでいる魚つてなーんだ。

6 ワニ+ワニは何だろう

7 絵を書いて見せたらひらがなの「え」をかけて。とつけられた。  
さてどういう意味だらう？

8 おじぎを何回もして頭をぶつけると役に立つものなーんだ。

9 柿の木を見るとおながが減りみかんの木を見るとおなががいっぱいになつた。なぜ？

10 毎日朝もひるも夜も追いかけっこをしているのっぽとちびの  
ものつてなーに。

そして、今日お父さんをにらみつけた理由とせじつけ、今日お父さんが森林学校に来ることになつてゐるからだ。

まず最初はお父さんのわがままな言葉から始まつた。僕が森林学校に行くところ」とをお父さんに言つたら

「えー、そんなこと早く何で言つてくれなかつたのー。いくよー先生たちには取材といふことと一緒に行くよー！」

とお父さんが言い始めたのだ。

こういふことはわかつてゐた。お父さんは大の山好きだ。こんなことを言われたら、何をしてでもいくに違ひがない。だけどあえて言つたのは絶対こなこと思つたからだ。

パパは上司の言つことなら何でも聞くので上司の一郎さん頼んでみんなが行つてもいいといはないよつた  
上司のみんなに頼んでもらうんだ。そういうことと一度はほつと女心したんだけど、甘かつた。

ある日、上司の一郎さんがうつむいて今度の取材の打ち合わせに來た。

そして最初は大丈夫だと思つて自分の部屋でゲームをして遊んでいた。

そしたらお父さんによばれた。

それで歩きながら密間に向かつて行くとお父さんがこんなことを話していた。

「実は、今度息子が森林学校に行くんですよ。それについていつてそれでその滝川荘とこうところに

取材といふことで行きたいので、時間をくれませんか。」

そして、お父さんが僕に気づいた。

「あつ来た来た、おい健次！今一郎さんに森林学校のことお話ししてあるんだ。」

僕は、それを聞いてまたびっくりして一郎さんを見た。一郎さんは

「それはダメだよ、今度の森林学校じゃなくたつて家のすぐ近くにあるんだからいつでもいけるだろー！」

と怒ったような口調で言ってくれた。でも、珍しくお父さんは一郎さんに反対して

「何言っているんですかー今の季節は取材で忙しいのでもうたぐにいけないんですよ。

だから今の季節のあの山入ったことがないんですよ。」

と言つた。一郎さんも負けずに言い返す。

「だが、さみなら勝手に休暇をとつてでもせめておもつんだが。」

確かにそのとおりだ。しかしお父さんはあきらめない結局負けたのは一郎さんだった。

一郎さんは、取材を許可してぼくに手を合わせて誤りながら会社に帰つていつた。

それで僕は、がっかりしながら今日を迎えた。  
しかしお父さんは寝坊して、じつやうみんなにつれて来ていらないみたいだ。

それで僕はバスのことと、お父さんのことに喜びながらひとつ泊まる場所滝川荘についたのだった。

## 答え

- 1 アイロン
- 2 秒 (急病)
- 3 一個

- 4 あぐら
- 5 かつお
- 6 わし (わ<sup>2</sup> + わ<sup>2</sup> = わ<sup>4</sup>)
- 7 まるで絵になつてない(。で「え」じゃなくなつたから)
- 8 とんかち
- 9 気(木)が変わつたから。

1  
0

時  
計  
の  
針

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6464a/>

---

山頂の事件

2010年10月9日21時03分発行